

# 軒先木口金具の意匠を構成する文様について

—第一次大極殿院の復原研究22—

はじめに 奈良文化財研究所では、現在、平城宮第一次大極殿院の諸建物の軒先木口金具の復原を検討している。垂木や隅木などの木口を覆う金具とみられる遺物は、奈文研の発掘調査で出土しており、『年報』や『紀要』などで報告してきた。しかし、金具の意匠を検討した報告は多くない。また、古代の意匠の分析は、金工品や染織の衣装などを除けば、建築史学・考古学分野では瓦の文様や彩色が中心で、建築金具の観点からはあまり論じられてこなかった。

そこで本稿では、建築金具から奈良時代の意匠の分析を試みる一端として、とくに大極殿院南門が建立された8世紀初頭の軒先木口金具の意匠について考察する。

**文様の種類と構成** 奈良時代の飾金具には、建造物、工芸品を問わず用いられる意匠文様がある。曲線状に伸びる茎と同所から派生する葉や枝などが1つの単位として繰り返される唐草文などはその一例である<sup>1)</sup>。しかし、このような意匠文様の名称と解釈については、既往の研究をみる限り、それぞれに定義がなされ、未だ統一をみない。その一方で、意匠文様を構成する、単位文様と呼ばれる最小単位の文様は、比較的、認識が共通している。よって、本稿では主に下記3種類の単位文様の有無と構成に着目し、意匠の分析をおこなう。

代表的な単位文様には、宝珠形、C字形、対葉形の3種類がある（図1）。既往研究によると、宝珠形は三山形や五山形など<sup>2)</sup>、もとは山の形を表した文様を祖形とし、中に猪目形の透彫りを入れる形状が、古い形式である。C字形は白鳳時代に現れる文様で<sup>3)</sup>、基本は名が示すようにC字の形をしており、先端を尖らせたものや蕨手状としたものが存在する。対葉形は7世紀末頃に唐から伝來した文様で<sup>4)</sup>、側面からみた葉形を線対称で向かいあわせにした形をしている。この対葉形を主要な構成要素とする文様を対葉花文とよぶ。また、対葉花文を1弁の花弁とみたて、点対称に複数弁配置すると、一輪の花を正面からみたような文様となる。この構成は花弁の枚数とともに正面形の花文などで呼称されている。その他の文様の名称については図1を参照されたい。

出土木口金具の概要 図2に示す金具9点は7世紀末

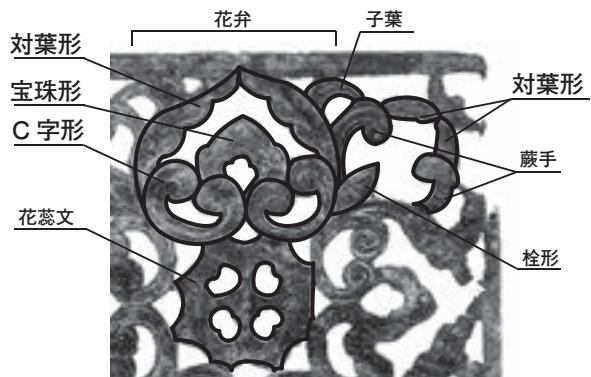


図1 代表的な単位文様（阿弥陀浄土院）

から8世紀を創建年代とする藤原京域と平城京域の寺院から出土した軒先木口金具であり、現在は奈文研が保管している。これには、後述する興福寺中門出土金具のように創建時の所用ではないと考えられる金具も含んでいる。しかし、薬師寺出土の後補金具のように、創建の文様様式を受け継ぐ事例も確認できる<sup>5)</sup>。このことから、9点は同年代の第一次大極殿院の諸建物の金具意匠を知る上で重要と考えられる。では、各金具がもつ意匠はどのようなものか。まずは、大きさ、形状、出土位置、使用される単位文様とその構成を整理しておこう<sup>6)</sup>。

**大官大寺金堂** 復原寸法は42cm×33cmの長方形で、厚2mm。基壇東北隅の基壇外装抜取溝などから、破片複数点が出土<sup>7)</sup>。意匠は、対葉形とC字形の単位文様を用いた唐草文を線対称で4区画に配置する。文様は線刻による輪郭線とその内外に施した透彫りで表現する。

**本薬師寺西塔** 直径10cmの円形で、厚2.4mm。東面地覆石抜取溝SX341から出土<sup>8)</sup>。中心には円形、上下左右には対葉形からなる花弁4弁を配置。文様は、線刻による輪郭線とその内外に施した透彫りで表現。

**本薬師寺東塔** 復原寸法は12cm×10.5cmのほぼ正方形で、厚2.7mm。9世紀後半の土器が入る南西隅の雨落溝出土<sup>9)</sup>。中心には円形、上下左右には対葉形からなる花弁4弁、花弁どうしが接する対角線上に蕾状の栓形を配置。西塔と同じく、文様は線刻と透彫りを施す。

薬師寺西塔① 復原寸法は直径15cmの円形で、厚3～4mm。享禄元年（1528）の戦火による焼土層出土<sup>10)</sup>。中心には円形、上下左右には対葉形からなる花弁4弁、花弁どうしが接する対角線上には蕾状の栓形を配置<sup>11)</sup>。線刻による輪郭線とその内外に透彫りを施す。

薬師寺西塔② 復原寸法は12cm×10.5cmのほぼ正方形で、厚2.5mm。西塔①と同じ焼土層出土<sup>12)</sup>。中心には円形、上下左右には対葉形からなる花弁4弁、花弁どうしが接する対角線上には蕾状の栓形を配置。西塔①と同じく、

部位	意匠文様	単位文様				
		対葉形	対葉形+C字形	宝珠形	宝珠形+C字形	3種類混合
隅木 尾垂木	唐草文					
垂木 (角形)						
	正面形花文					
垂木 (円形)						

図2 金具の部位と文様の関係

文様は線刻と透彫りを施す。

**興福寺中金堂①** 復原寸法一辺は17cmの正方形で、厚2mm。北面東回廊北部の土坑SK8064出土<sup>13)</sup>。中心にはおしべとめしべをあらわす花蕊文、上下左右には宝珠形を用いた花弁4弁、花弁どうしが接する対角線上には、栓形と宝珠形を配置。透彫りを施すが、線刻はない。

**興福寺中金堂②** 復原寸法は一辺15cmの正方形で、厚2mm。やはりSK8064出土。中心には円形、対角線上には、宝珠形とC字形からなる花弁4弁、四隅には蕾状の栓形を置く。透彫りを施すが、線刻はない。

**興福寺中門** 直径12.5cmの円形で、厚2.5mm。遺物は、永承から治承再建期（1046～1180頃）の地覆石上の焼土層中より出土<sup>14)</sup>。枠内には1つの宝珠形、背中あわせの2つのC字形、C字形から伸びる対葉形で表現した花弁4弁を配置。透彫りを施すが、線刻はない。

興福寺中門出土金具は、再建期以後の遺物と考えられ、同年代の平等院鳳凰堂中堂（1053年）や中尊寺金色堂（1124年）の軒先木口金具に線刻がないことから、金具の年代を11～12世紀としている。ただし、宝珠形とC字形からなる形状は、平安宮豊楽殿の垂木木口金具の文様と類似することから<sup>15)</sup>、様式年代は、豊楽殿創建と同じ9世紀に遡る可能性もある。

**阿弥陀浄土院** 11.2cm×11cmの正方形で、厚0.6mm。池SG7700の石敷直上から出土<sup>16)</sup>。中心には花蕊文、上下左右には宝珠形を2つのC字形で挟み、そこからさらに対葉形が伸びるという花弁4弁を配置。花弁どうしが接する対角線上には蕾状の栓形を配置、四隅は蕨手、子葉、対葉形などで埋める。文様には線刻と透彫りを施す。

この金具の特徴は、3種類の単位文様が併存し、線刻が施され、意匠性の高い点である。これと類似する文様の構成が韓国慶州月池出土の金銅製透彫門環装飾にみられる<sup>17)</sup>。月池からは、儀鳳4年（679）銘の瓦片と、調露2年（682）銘の文様磚が出土している<sup>18)</sup>。月池出土金具の製作年代をこの時期と考え、さらにこれらを基準とすれば、阿弥陀浄土院の文様構成は7世紀に遡って存在したと考えることも可能である。

**金具の取付け部位と特徴** 出土した9点の大きさ、形状、出土位置からは各金具の取付け部位が推定できる（図2）。これを踏まえ、取付部位ごとの文様の特徴を整理し、意匠文様にみられる傾向について考察したい。

隅木あるいは尾垂木所用と考えられるのが、大官大寺金堂の金具で、先述のように、線対称の唐草文を配置している。角形の垂木所用と考えられるのが、本薬師寺東塔、薬師寺西塔②、興福寺中金堂①、同②、阿弥陀浄土院である。正面形の花文を中央に配置し、四隅を栓形や蕨手で埋めている。円形の垂木所用が、本薬師寺西塔、薬師寺西塔①、興福寺中門である。枠いっぱいに正面形の花文を配置する。以上から、垂木所用では、線対称の文様構成をとる金具は出土していないことがわかる。

意匠文様に用いる単位文様は、各部位ともに1種類もしくは2種類の場合が多い。とくに対葉形はよく用いられ、対葉形が入る意匠文様にはほとんど線刻がともなう。このことから、7世紀末～8世紀初頭の軒先木口金具の意匠文様は対葉形の使用が主流であったと推察できる。線刻を施す点も踏まえれば、対葉花文を用いた意匠文様が莊厳なものとして扱われていたとも考えられる。

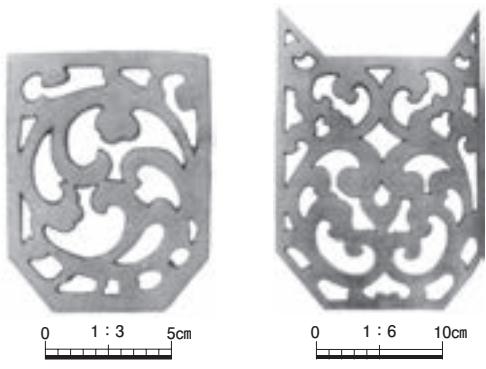


図3 平等院鳳凰堂中堂 裳階  
左:地垂木木口金具 右:地隅木木口金具(復原)

**取付部位と意匠との関係** 軒先木口金具においては、各部位の意匠と、軒先全体の文様との関係も検討が必要だろう。以下では古代建築の現存事例から考察したい。

隅木木口金具について、法隆寺金堂（7世紀後半）・五重塔（7世紀末）、平等院鳳凰堂中堂、中尊寺金色堂では、いずれも隅木木口の風蝕痕から金具を復原している。このうち法隆寺金堂・五重塔の文様は、大官大寺金堂と同じく木口面を4つに分割し、区画内で文様を展開する<sup>19)</sup>。また、平等院鳳凰堂中堂裳階の地隅木は文様を線対称で構成する<sup>20)</sup>。

垂木と隅木の意匠の関係を知る上で注目できるのが、平等院鳳凰堂中堂裳階の地垂木と地隅木の文様構成である（図3）<sup>21)</sup>。地垂木が、枠の中心に巴文のような円形文様を置き、周囲を蕨手で埋める意匠であるのに対し、地隅木は、円形文様が左右からぶつかり潰れるような線対称の文様を用い、周囲の蕨手も線対称となっている。妻側と平側で同じ文様を連続して並べ、交差する隅木で文様どうしをぶつけるという設計思想が想定できる。線対称である大官大寺金堂出土金具もこれに該当する可能性はあるが、現存事例にみる尾垂木木口金具の意匠文様を踏まえ検討を進めたい。

**まとめ** 以上から、分析対象にあげたような8世紀初頭の格の高い建物の軒先木口金具に用いられた意匠について、以下、①～④にまとめられる。

- ①角形の垂木は中央に正面形の花文、四隅に栓形・蕨手などを配置。
  - ②円形の垂木は正面形の花文を枠いっぱいに配置。
  - ③軒先金具には共通して対葉形を用い、線刻を施す。
  - ④隅木・尾垂木は線対称の唐草文を配置の可能性。
- 本稿では、軒先木口金具の意匠について、単位文様か

ら分析をおこない、8世紀初頭の意匠的特徴を考察した。また、各金具の意匠は取付部位ごとに特徴をもつだけではなく、軒先全体の意匠構成を踏まえた設計であると考えられる。

今後の課題として、今回考察した意匠が8世紀初頭にどのように実現されたかについては、金具の成分や製作技術を踏まえあきらかにしていきたい。  
(大橋正浩)

#### 註

- 1) 西村兵部「上代の唐草」『日本の文様 唐草』光琳社出版株式会社、2-17頁、1974。
- 2) 山本謙治「法隆寺の透彫り金具文様—モティーフ融合およびモティーフ喪失文様考察のための作例資料(1)ー」『阪南論集 人文・自然科学編 44』45-59頁、2008。
- 3) 4) 京都国立博物館『金色のかざり』13-14頁、2003。
- 5) 薬師寺では金堂・講堂・西塔から、複数点の後補金具が出土している。これらの金具は後述する西塔①②よりも裂片が小さく、一部の線刻・透彫り表現に簡略化がみられる。基本的な形状、用いる単位文様の種類、文様構成は西塔①②と同じため、本稿では分析対象からのぞいた。
- 6) 金具の大きさ、出土位置は既往の報告を参照。厚みの記載がない本薬師寺東塔・西塔は、今回実測した。
- 7) 奈文研『年報1975』48-51頁。
- 8) 奈文研『年報1997-II』24-37頁。
- 9) 奈文研『藤原概報25』66-74頁、1995。
- 10) 奈文研『薬師寺報告』本文169-173頁、1979。奈文研『薬師寺報告』図版PL.120、1979。
- 11) 林良一『東洋美術の装飾文様 植物文篇』同朋舎出版、179、183頁、1992。
- 12) 前掲註10。
- 13) 奈文研『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報III』興福寺、29頁、2002。
- 14) 奈文研『年報1999-III』57頁。奈文研『興福寺第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報I』興福寺、1999。
- 15) 京都市考古資料館『平安宮豊楽殿—特別展図録—』図版40、41、1-4頁、1988。
- 16) 奈文研『年報2000-III』59-60頁。
- 17) 大韓民国文化部文化財管理局『雁鴨池発掘調査報告書(図版編)』(日本語版)、図502、1993。
- 18) 大韓民国文化部文化財管理局『雁鴨池発掘調査報告書(本文編)』(日本語版)329頁、1993。磚と瓦片は、他の出土遺物と年代が整合するかを十分に検討する必要がある。
- 19) 法隆寺國寶保存委員會編『國寶 法隆寺金堂修理工事報告』132-133頁、1962。同『國寶 法隆寺金堂修理工事報告附圖』296-297頁、1956。同『國寶 法隆寺五重塔修理工事報告』171-180頁、1955。同『國寶 法隆寺五重塔修理工事報告附圖』235-239頁、1955。
- 20) 21) 京都府教育廳文化財保護課編『國寶 平等院鳳凰堂修理工事報告書』207-208頁、1957。同『國寶 平等院鳳凰堂修理工事報告書 附圖(二)』141-144頁、1957。